

## 第33回 日・韓・中ジュニア交流競技会 トレーナーレポート

國田 泰弘<sup>1)</sup>

1) 公益財団法人日本陸上競技連盟医事委員会 トレーナー部運営部員

### <はじめに>

第33回日韓中ジュニア陸上競技交流大会は、2025年8月25日、27日の2日間（派遣期間：8月23日～29日）にかけて、中国・内モンゴル自治区にて開催された。選手団は選手22名（男性11名、女性11名）、コーチ4名、メディカルスタッフ（トレーナー）1名であった。

### <メディカルスタッフ>

・トレーナー：國田 泰弘（トレーナー部運営部員）

### <現地情報>

#### (1) 気候条件

現地の気候は、日本の8月と比較して非常に過ごしやすく、朝晩の気温は20℃を下回り、日中は概ね25℃前後で推移した。また、湿度は30%前後と低く、暑熱ストレスは少ない印象であった。

#### (2) 宿泊環境

選手の宿泊部屋は2名1室で割り振られ、居住空間としての問題はなかった。食事は宿舎内のレストランにてビュッフェ形式（1日3食）で提供され、炒め物・煮込み・点心（ヤムチャ）、果物、生野菜など中華系の料理が中心であった（図1）。一方で、慣れない香辛料や独特な香りのため、「食が進まない」と訴える選手も一部見られた。各選手には1日2本のペットボトル水が配布され、練習会場でも自由に水を補給できる環境が整っていた。洗濯設備として洗濯機は備えられておらず、全て手洗いで対応した。

#### (3) 衛生・生物環境

都市部や競技場周辺では日本の蚊に似たような虫が多く、サイズも比較的大きいものが目立ち、刺されたことにより痒みと腫脹を訴える選手がいた（図2）。衛生面を含め、選手が自身の体調管理をする上で注意すべき場面が多い環境であった。



図1. バイキング形式の食事

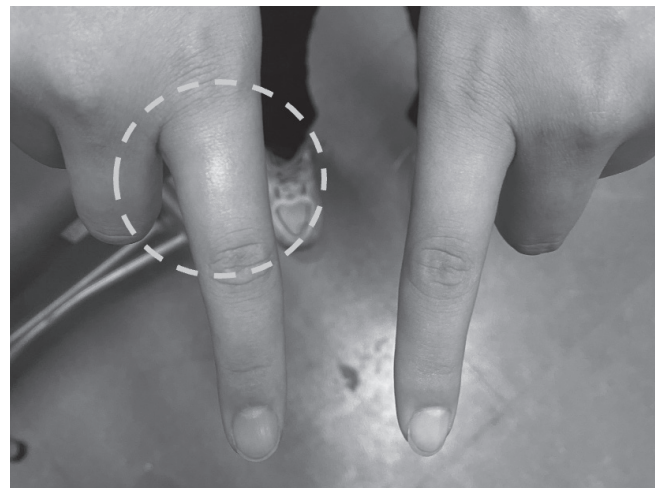


図2. 虫刺されによる腫脹の訴え（右手第二指、丸線で囲んだ箇所）

#### (4) 言語環境

現地スタッフおよび住民の多くは中国語のみでのコミュニケーションとなり、英語による意思疎通は困難であった。そのため、通訳ボランティアの方やスマートフォンの翻訳アプリを使用することによりコミュニケーションをとった。

#### <トレーナー業務（救護体制・処置内容・備品）>

##### (1) 宿舎におけるコンディショニング対応

自室（ツインルーム）をフィジオルームとして転用し活動を行った。マッサージベッドを搬入し、選手の利用希望に応じて予約制でコンディショニング対応の時間を設定した。

##### (2) 練習会場・大会会場での対応

試合当日は試合会場が2箇所（投擲種目の一部だけ別会場）と、ウォーミングアップ会場の合計3箇所に選手が分散していた（図3）。会場間の移動は大会が運営するバスに乗って移動可能であったため、試合前のコンディショニング（主にテーピング）が必要な選手を把握し、コーチと相談しながらトレーナーの配置場所を設定し、それぞれの会場を移動して対応した。いずれの会場においても選手控室や空いている日陰スペースを確保し、ベッドを設置して活動した（図4）。

##### (3) 利用実績

帯同期間中の延べ処置件数は以下の通りである。

- ・利用延べ人数：計68名（男性32名、女性38名）
- ・処置別内訳
  - ・ マッサージ : 51件
  - ・ ストレッチ : 10件
  - ・ テーピング : 11件
  - ・ アイシング : 18件
  - ・ 超音波療法 : 9件
  - ・ エクササイズ指導 : 9件

※一度のコンディショニング対応で複数の処置を実施している場合もあり

#### <所感>

本大会は、1日の練習日を挟む2日間の競技日程という、通常とは異なるスケジュールで実施された。日本選手団22名の多くは初めての日本代表選出および海外遠征であり、移動、食事、衛生環境への適応に戸惑う場面が多く見られた。また、バスへの荷



図3. 試合会場、待機場所の様子（投擲種目の一部は別競技場）



図4. 投擲試合会場の選手控室に設置したトレーナーベッド

物の置き忘れなど、不慣れな環境下に起因する軽微なトラブルも散見された。

現地では、コーチを中心に大会事務局と情報共有を行いながら活動したが、日本側が事前に把握していた情報と現地側の運営内容が一致しない場面が多く、練習時間や会場調整において当初の案内と異なる対応が頻発した。その都度、スケジュールの再調整や移動計画の変更が必要となり、選手およびスタッフ双方に大きい負担が生じていた。

トレーナー業務においては、帯同選手全員が初対面であったため、事前のメディカルチェック情報をもとに積極的な声掛けを行い、コンディショニング状況の把握と関係構築に努めた。一方で、長距離移動後の疲労蓄積により対応希望者が集中する時間帯があり、一人あたりの対応時間が限られた点は今後の課題である。

大会初日には急性外傷が発生し、医師不在の状況

下で受診の要否判断、および日本スポーツ協会、大会本部との調整を行った。対応は滞りなく実施できたが、判断の妥当性について事後的な検証と共有の必要性を感じた。今後は、オンコールドクターとの事前連携をより明確にした体制構築が求められる。

本大会を通じて、練習時間の急な変更、会場分散、外科的・内科的対応、言語的制約など、想定外の事象が多数発生した。海外遠征帯同においては、計画通りに進まないことを前提とした準備と、変更時の迅速な情報共有および役割分担を明確にしておくことが重要である。